

# 「浦里っ子と魔女さん」

ーファンタジーの世界の中でー

上田市浦里保育園 大橋美度利  
吉池まゆみ

私たちの浦里保育園は、子どもたち34人というかわいい保育園です。小規模園であることを生かしながら自然に恵まれた環境の中で一人ひとりが意欲的に自主的に遊び込める環境をつくってやるにはどうしたらよいか、ということ为先ず話し合い、保育を進めていくことにしました。つまり「さあ今日は絵を描きましょう」「ボール遊びをしましょう」というように保育者側から与えるのではなく「先生〇〇して遊びたい」「〇〇すれば楽しいね」と子ども側から遊びが広がっていくような保育をしたいと考えました。ファンタジーの世界の中で、胸がワクワクするような感動をもち、そこからどんどん遊びが広がっていくような経験をさせたい、そして、その活動の中から意欲、自主性が育っていくようにしたいという共通意識、理解のもとで保育を進めてきました。子どもたちを落ちつかせ、集中させる手段としてやってみせた手品から、魔女さんの活動へと広がっていきました。

子「先生それ誰に教えてもらったの？」

私「う〜んどうしようかな、教えてやろうかな」

子「お願い、／教えて、／」

私「実はねえ、先生がお山に行った時魔法使いのおばあさんに会ってねえ……」

子「えー ぼくたちも魔法使いのおばあさんに会いに行こう」

こうしてファンタジーの世界へ入っていきました。「まじょさんに手紙を書きたい」ということで、手紙をつけて青空に風せんをとばしました。子どもたちの願いを叶えてやる為、魔女さんからの返事としてしかけ(手立て、援助の意味)をしなければと考

え、年長の菅平遠足の時に『赤い風せん見つけたよ 勇気のある子になるんだよ まじょより』という言葉と、今まで遊んだことがないオニごっこをしかけました。

魔女さんから返事が来た／＼と子どもたちは大喜び。年少から年長まで楽しく遊ぶことができました。保育園の庭のすみに杉の木がありますが、その木にカラスが巣をつくり、赤ちゃんカラスにえさを運んでくる様子や巣立って行く様子を毎日見ていました。年長T君のお父さんが「カラスは魔法使いの弟子だ」と教えてくれたことから、その杉の木は魔女の木となり魔女さんとのやりとりの場になっていきました。「勇気のある子になるんだよ」(しかけ)と魔女さんから手紙が来たことから、勇気出してプールがんばる／＼とはり切ったり、魔女みこしをみんなでつくって汗びっしょりになってかついだり、「勇気ってオバケ屋敷に入ることだよ」というM君の発想から、オバケ屋敷をつくったり自主的な活動になっていきました。そして、もり上がりをみせた運動会ですが、共通のイメージの中で楽しめるよう、子どもたちとつくっていきました。「魔女さんの運動会にしたい」「年中さんは魔法使いの弟子になって」「年少さんは魔法にかかったうさぎになって」…と子どもたちのイメージの方が先行していきました。子どもたちの会話からリズムは屋外劇風にしてみることにしました。種目の中に魔女さんに教えてもらったゲームも入れ、大満足の運動会になりました。

運動会も終わったある日、年少さんが砂場を掘りながら「ここほれば魔法のちじゅ(地図)が出てくるかもしれないよ」と本気になって遊んでいました。その願いを叶えてやる為、宝の地図と宝物を魔法の木につるしておきました。2日目にそれを発見し、田んぼへ宝さがしに出かけました。年長には「魔法はまだ教えられないよ でも手品をプレゼントしよう まじょより」という手紙と年中、年少にはミニトランプを宝物としました。次の日から「お楽しみ会にお家の人に手品をやってみせるんだ／＼」と毎日手品の練習を本気になってやる年長の姿が見られました。劇やハンドベルの練習にも力が入っていました。卒園式には、魔女さんとのでき事を紙芝居にして発表しました。この一年の活動を通し、年齢差、個人差の中で共通のイメージをもって活動を進めていく、発展させていくことはむずかしいことですが、子どもの興味、関心を見極め一人ひとりの言動や発想を見落さず、方向性を示してやることによりファンタジーの世界が広がっていき、意欲的・自主的に活動できることを私たちは子どもたちから

学びました。

二年目も魔女さんのイメージが続き、種を育てたことと、ロケットについての2本立てで展開していきました。ジャングルジムをロケットに見立てて、操じゅうしている気分「魔女さんどこかな」「手紙こないかなあ」とはじまったのです。本年の子どもたちの傾向として落ちつきのある子どもたちではあるが、保育者の指示を待つような、指示待ち傾向にあるように感じたので、楽しい経験の中から自主的に行動したり、遊びをつくり出す力を育てたいという願いをもち保育を進めることにしました。そこで、①自分たちで気づいてやらないと困る経験、②継続の大切さ、③変化があって楽しみに活動できること、④満足のいく楽しい体験になること、という願いで「この魔法の種をまいてごらん まじょより」という手紙をしかけてみました。水くれをわすれ枯れそうになったり「誰ちゃんはやらなかった」などトラブルもありましたが、助言したりヒントを出しながらできるだけ自分たちで気づくようにしていきました。「魔女さん 魔法の種をありがとう」と風せんに手紙をつけてとばしました。「本当に魔女さんに届いたか見に行きたい」という子どもたちの発想から、大きなロケットづくりがはじまりました。「何でつくったらいい」の話し合いから「宇宙服もいるよ」「コンピューターもいる」「設計図も描かなくちゃ」と活発な活動になっていきました。皆んなでもちよった箱だけでは足りなくなり、酒屋にダンボール箱をもらいに行ったりし、失敗をくり返し、ホールに大きなロケットができ上がりました。ロケットづくりと並行して、原っぱへ散歩に行くと、白つめ草や赤つめ草の花のかたまりがあり「わあ、お花の迷路みたい、／＼ロケットに乗ってお花の里へ行って、お花の迷路しよう」という発案で、お花の迷路、迷路オバケごっこがはじまりました。年少さんから年長まで共通のイメージの中で楽しく遊ぶことができました。運動会は、お花の迷路ごっこから年長は宇宙の探検隊になって、魔女さんを探しに行きたい、年中は迷路のオバケになりたい、年少はお花の里のお花になりたいと子どもたちがストーリーをつくっていきました。

今年も屋外劇風のリズムができました。なりたい役になりきって楽しい運動会になりました。秋にはカボチャや花の種の収穫です。「このかぼちゃ食べると、魔法のパワーが出るよ」とかぼちゃのパーティーをしました。「魔法のパワーがあるんだもの

できるよ」とやる気の支えになりました。

そして、浦里っ子と魔女さんストーリーは三年目になりました。大人はとくにネタぎれ状態になるところなのに、子どもの発想はすごいものです。「先生、魔女さんからお手紙こないね」「お昼寝、ねない人いるからだよ」など子どもたちなりに悩んでいたようでした。「魔女さんどうしたんだろうね」と投げかけてみると「浦里保育園さよならして、どっかへ行っちゃったのかなあ」「宇宙へ行っちゃったんじゃないの、宇宙人の子どもと仲良しになっちゃったんだよ」という話になっていきました。「宇宙に向ってテレパシーを送ると魔女さんからお手紙くるかもしれないよ」ということで、魔法の杉の木の下に行っては、宇宙に向ってテレパシーを送るポーズを年長を中心に全員を誘ってする姿が見られました。「今年のおみこしはU F Oをつくるんだ、魔女さん、宇宙人の子どもと探検してるんだ」とはり切ってU F Oみこしをつくりました。同時期に「宇宙人の仲間集めオニごっこ」ということで、魔女さんからのメッセージとしてしかけてみました。

「やっぱりきた、魔女さんから教えてもらったオニごっこだ」と大喜びで遊びました。「ガチャッとカギをかけたらU F Oから出れないんだよ」など意欲的に遊ぶ姿が見られました。

プールの時期となり、子「先生魔女さん見てるかなあ」T「そうだね、魔法の木のそばだもの見てるよ、きっと」と言うと、年長は自分なりの目標をもってがんばる姿が見られ、年中も全員バタ足で進めるまでになり、年少さんも水がこわいと泣いていた子まで全員が顔が入れられたり、浮けるまでになったりと、魔女さんの威力はすごいものだと思います。プールでの自信が運動会へとつながり、とび箱、鉄棒、のぼり棒とがんばりを見せました。リズムの振りつけもほとんど子どもたちがつくり、宇宙の探検運動会は、どの子の顔もやりとげた満足でいっぱいでした。意欲も自主性も見られた運動会になったと思います。他にも色々な経験があって、毎日魔女さん、魔女さんとやっていたわけではないのですが、三年間の積み重ねの中で、子どもたちの心の中に魔女さんが根づいていたことで楽しい活動が展開してきたように思います。私たち保育者は、子どもたちの発想やエネルギーに学ばせてもらった三年間だったと思います。

魔女さんの活動をはじめた時の年長さんが、今小学校二年生になっています。学校の帰りに時々保育園に顔を見せては「先生、魔女さんあれから、どうなった？」と聞いていきます。

『この子たち、信じてくれてるんだ』

こんな時は保育者として幸せを感じるひとときです。